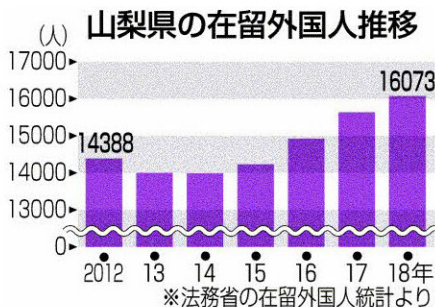




やまなし
医療最前線
令和を担う
県立中央病院から

〈186〉



つかはら・ふみえさん
東京医療保健大卒業後、横
浜の病院勤務やオーストラ
リア留学を経て2014年から
県立中央病院勤務。笛吹市
出身。32歳。趣味は旅行。

事に対する考え方も異なるため、診
療を巡りトラブルになるケースもあ
る。「頭に触れさせてはいけない」「輸

技術だった母の影響で、山梨学院高

医療通訳・塚原史枝看護師 異なる文化を理解しケア

山梨県立中央病院緩和ケア病棟に勤務する塚原史枝看護師32は、持ち前の語学力とオーストラリアでの介護士経験を生かし、院内で「医療通訳」として活躍している。文化が異なる外国籍の患者と英語を使ってコミュニケーションを図り、思いに寄り添うケアを目指す。

近年、増加傾向にある。法務省の在留外国人統計によると2018年12月末時点で1万6073人。訪日外国人観光客数の増加もあり、県立中央病院に来院する外国人患者数は増加しつつある。

外国人患者は言葉による壁があるだけでなく、国によって文化や宗教、思想などが違い、保険制度や薬、食も協力を求められることもある。

から東京医療保健大に進学し、看護の道に進んだ。初めて勤務した横浜の病院では外国人患者が多く、医療通訳の必要性を痛感した。その後、「人生は一度きり」と思い立ち、オーストラリアへ2年間留学して介護士資格を取得。末期がん患者や認知症高齢者が暮らす自立支援施設で介護士として働き、日本の医療、ケアとの違いを身をもって感じた。

2014年から勤務する県立中央病院でも外国人患者の増加を肌で感じ、今年から救急科の医師と協力し、院内で月に1回、医師、看護師、事務職らを対象にした医療英会話セミナーを開催している。国によって異なる医療やケアを伝える外国人学生ボランティアに参加してもらいコミュニケーションを実践。学生に対しても日本の病院の知識を伝える機会としている。

「背景を理解すれば、患者さんと信頼関係が築けるはず」。東京五輪を控え、外国人客のますますの増加が予想される中、医療分野での懸け橋を目指している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します